様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ３０ 年　 ６ 月　 ８ 日現在

機関番号：３２６１２
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2015～2017
課題番号：１５Ｋ２０９５８

研究課題名（和文）近代エジプト地方社会における医療・衛生事業の研究

研究課題名（英文）Medicine and Hygiene in the Rural Society of Modern Egypt

研究代表者
勝沼　聡（Katsunuma, Satoshi）

慶應義塾大学・文学部（三田）・准教授

研究者番号：９０５９３２０２

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,400,000円

研究成果の概要（和文）：20世紀前半のエジプト地方社会では、19世紀初頭以降に進展した農業開発により衛生状態の悪化が見られたが、その対策として講じられたであろう医療・衛生事業の実態には未だ不明な点が多い。本研究は、当時出版された政府刊行物や雑誌を収集・参照することによりその解明を目指した。当初想定していたよりも史料的制約が大きく、当該地方社会における当該事業の実態について十全に解明し得たとは言えないが、今後の研究の基礎となる関連史料を収集したほか、医療・衛生問題に対する当時の知識人の関心が、都市生活に関係するものに集まっていたことも新たに把握できた。

研究成果の概要（英文）：In the early 20th century, rural Egypt faced the deterioration of hygiene condition due to agricultural development since 19th century. This study aims to unravel the details of measures taken by the Egyptian government to improve the rural health. However, through collecting historical records, most of intellectuals at that time were mainly interested not in the affairs related to rural area, but urban spaces.

研究分野：近代エジプト社会史

キーワード：エジプト　開発原病　医療・衛生史

１．研究開始当初の背景

これまで、エジプトを含めた近代中東史研究における医療・衛生史の関心は、主に世界規模の拡大を見せた疫病とその対策に注がれてきた。19 世紀前半に見られた蒸気船航路の開設や鉄道の敷設など、交通機関の飛躍的な発展によるヒト・モノの移動の急増は、インドの風土病だったコレラをはじめとする感染症の拡大を促し、中東地域の諸政権は防疫など医療・衛生の制度化を進めた。

しかし、当時の中東地域が直面した医療・衛生上の課題は、外来の疫病だけではなかった。本研究が対象とするエジプトの場合、地方社会における衛生状態の悪化が見られたことが指摘されている。

上記の展開には、19 世紀前半のエジプト州総督ムハンマド・アリーが行なった新たな商品作物（長繊維綿花）の導入と夏作の拡大により促された、通年水路式灌漑への移行が深く関係している。

19 世紀を通じて進展した灌漑制度の変容は、20 世紀初頭のアスワン・ダムの完成により一応の完成を見たが、ダム建設による氾濫の抑制は、従来は限定的であった風土病（ビルハルツ住血吸虫症）の拡大をもたらしたほか、水路網の整備による土地への用水の供給過剰が地下水位の上昇をもたらし、湿地帯の拡大が生じた。また、20 世紀前半はエジプトにおける稲作が拡大した時期でもあった。

以上のように、20 世紀初頭以降にはエジプト地方社会における衛生状態の悪化をもたらした条件が揃った一方、同時に疾病の感染経路の解明など近代医学の飛躍的発展や主に知識人の間に高揚を見せた民族主義の動きといった、当該問題に関してさらなる対応を促す要因も生じていた。このような状況をふまえ、当該時期にはエジプト地方社会における衛生状態の悪化を受け、何らかの対策が講じられた可能性が高いと考えた。

２．研究の目的

本研究の目的は、20 世紀前半のエジプト地方社会に展開された医療・衛生事業の実態解明と同事業が当該社会に及ぼした影響の検討である。

前述したように、中東地域における医療・衛生史は、港市に代表される都市部の防疫や衛生の改善に関するトピックが主要な研究課題だった。しかし、エジプトを含む非西欧世界の近代において、防疫に代表される都市部における医療・衛生事業の実施には、対外関係や在留外国人への配慮が多分に影響している。

一方、20 世紀前半のエジプト地方社会における医療・衛生事業は、農民が大半を占める現地社会の人々を主な対象とするほか、先述したような当時の地方社会を取り巻く状況をふまえると、開発の進展に伴い深刻化した疾病（＝開発原病）への対応が主であると考えられるなど、都市部で展開された医療・衛生事業とは大きく異なる性格を持つ。また、19 世紀以降、継続的に医療・衛生の制度化が進んだ都市部の状況に関する情報は比較的豊富にあるのに対し、エジプト地方社会における医療・衛生の制度化に関する情報は 19 世紀中葉の種痘の実施や 1940 年代以降の外来の疫病の拡大に関するもの以外、具体的な実態解明はほとんど進んでいない。さらに、現地社会に対する直接的な医療・衛生的介入は、実施主体の中央権力と地方社会との間にさまざまな摩擦や交渉を生じさせた可能性が考えられ、その把握や分析は近代エジプト医療・衛生史の進展だけにとどまらない、当該時期のエジプトにおける中央と地方の関係を探るうえで重要な視座を提供することが期待される。

以上の目的を達するために、具体的には、以下の 3 点のトピックに関する検討を行うこととした。

(1) 地方社会の衛生状態の定量的把握
(2) 医療・衛生事業の具体相の解明
(3) 同事業が地方社会に与えた影響の評価

３．研究の方法

本研究を進めるにあたり、文献史料に依拠した歴史学的方法論を採用した。以下では、具体的な研究方法を上記３点のトピックごとに述べる。

まず(1)「地方社会の衛生状態の定量的把握」に関しては、国内外に所蔵の当該時期の疾病感染者数に関する情報を含む年次報告書や農業統計など各種統計資料を収集・参照することにより、マラリアやビルハルツ住血吸虫症など、とくに農業開発と強い相関関係があることが推測される疾病に焦点を絞り、感染の拡大が見られた地域の同定を進めたほか、感染者数の推移の把握などにより、これら疾病の拡大状況の検証を進めた。

(2)「医療・衛生事業の具体相の解明」に関しては、内務省公衆衛生局や関係機関が発行した各種年次報告書の記述を手がかりに、地方社会を対象に実施された医療・衛生事業の実態を把握する作業を進めた。具体的には、当該事業の実施を可能とした制度的背景の把握のほか、実施状況の地域間偏差や実施が確認された地域における医療・衛生事業の特徴などを史料の記述に依拠して明らかにすることを目指した。

(3)「同事業が地方社会に与えた影響の評価」に関しては、医療・衛生事業を行うにあたり支配の末端に位置する村落統治機構が果たした役割の解明のほか、政府が実施した公衆衛生的介入に対する地方社会の反応を示す具体的事例の収集と分析、医療・衛生事業における医師をはじめとする知識人の活動や言説の分析などを試みた。これらの作業を行うことにより、医療・衛生事業の実施により地方社会がどのような影響を被ったの

か明らかにすることを目指した。

４．研究成果

補助を受けた全期間を通じて、国内はもちろんのことイギリス（ロンドンの大英図書館、国立公文書館のほかウェルカム財団図書館など）やエジプト（カイロの国立図書館）で海外調査を実施し、当時のエジプト政府が発行した刊行物のほか、アラビア語雑誌記事などを精力的に収集した。とくに今回、これまでほとんど利用されたことのない内務省公衆衛生局発行の各種史料の所在を確認・収集できたことは、今後近代エジプト医療・衛生史研究を進めるうえでも重要な成果と言える。

(1)「地方社会の衛生状態の定量的把握」については、統計資料を利用することにより対象時期における多様な感染症の発生状況をある程度通時的に把握することができた。また、想定した通り、用水の過剰供給や稲作の展開が見られた下エジプトやファイユームを中心にマラリアの発生が際立って多く見られ、農業開発の進展と当時感染の拡大が見られた疾病との間に一定の相関関係があることが確認できた。

続いて(2)「医療・衛生事業の具体相の解明」については、上記のマラリアに加え、ビルハルツ住血吸虫症など農業開発の進展と深い関わりを持つ感染症に焦点を絞り、どのような対策が実行されたのかを検討した。しかし残念なことに、マラリア対策委員会やビルハルツ住血吸虫症対策委員会など、開発原病対策を担う組織が発行した報告書など今回入手しえた諸史料には、実施された施策に関する具体的な情報が極めて乏しく、概要のみの把握にとどまった。

対象時期のエジプト地方社会における当該疾病の発生を受け政府が実施した医療・衛生事業は、①感染者に対する医療サービスの提供、②蚊など病原菌を媒介する生物やその生息地など感染拡大を促す要因の除去、③感染のメカニズムや予防法など感染症に関する知識・情報の普及を目的とした啓蒙活動の3 点に集約されるが、とくに②や③に関して当該事業がどのように展開されたのか、実施のさいに専門家以外がどのように関与したのか、あるいは地方社会の住民が医療・衛生事業にどのような反応を示したのかなど、詳細な情報を得ることができなかった。

また、①に関してもビルハルツ住血吸虫症の患者に対する対応（確認できた限り、来院者への対応が主体）が示唆するように、当時の地方社会における感染症の広がりに対して政府がとった対応にはかなり受動的な一面が見受けられ、地方社会に対する積極的な介入を伴うものではなかった可能性が高い。

したがって、当時の新聞記事への網羅的調査ができなかったことや、新史料を参照することにより今後新たな知見が得られる可能性を否定できないことなどのために暫定的な結論にとどまるが、医療・衛生事業の展開過程で政府をはじめとする事業主体と地方社会の間に摩擦・対立が生じた例は限定的だったことが想定される。

最後に(3)「同事業が地方社会に与えた影響の評価」については、既に述べたように事業実施の詳細な経緯、実施過程に生じた地方社会との摩擦・対立に関する情報が入手できなかったため、当時の医療・衛生事業に関する知識人の活動や言説が地方社会に及ぼした影響に分析の焦点を絞らざるをえなかった。この作業を行うにあたり、当時の代表的な啓蒙的雑誌である『アル＝ヒラール』『アル＝ムクタタフ』両誌をはじめ、医療・衛生に関する記事を収録した史料の収集や分析を進めた。

しかし、この作業を進めた結果、上記の両誌だけでなく医療・衛生に関する専門誌においても、地方社会の医療・衛生問題に関する記事は極めて少ないことが明らかとなった。カイロの国立図書館の資料調査の成果が想定を下回ったことも大きな誤算だった。同館所蔵の雑誌目録から相当程度の雑誌記事が収集できると期待したものの、蔵書管理状況の劣悪さもあり、閲覧申請をした雑誌の大半が閲覧できなかった。

収集できた関連記事についても、その大半は都市中間層が直面した医療・衛生問題に関するトピックを扱ったものであり、当時の言論界における地方社会に対する関心の低さが浮き彫りとなった。研究開始段階において、地方社会における衛生状態の悪化（＝開発原病の感染拡大）や民族意識の醸成という当時の時代状況をふまえ、知的エリートの間に一定の関心の高まりがあったものと仮定して研究に着手したものの、少なくとも現段階では全く逆の結論を下さざるをえない。すなわち、印刷メディアの主要な読者層である都市中間層と地方社会との断絶である。

19 世紀末～20 世紀初頭のイギリス占領時代の医療史に関するある先行研究は、医学教育の有償化、イギリス化（＝英語化）などの諸施策により、当時の医師の多くは都市部を拠点とし、外国人を含めた都市部のエリート層を診察する開業医となる者が多かったという指摘をしており、知識人による地方社会における医療・衛生問題への関与の乏しさには、このような医師の行動形態が大きく影響している可能性もある。

今後の課題としては、限定的な分析にとどまる可能性が高いものの、得られた情報をもとに本研究課題に関する研究成果を取りまとめると同時に、以上のような史料状況をふまえ、地方社会よりもむしろ都市社会を対象に、特に中間層が抱えていた医療・衛生問題の検討を進めることがあげられよう。特に中間層による都市の医療・衛生問題への関与の実態と、それが都市の構造や制度、都市民の生活などにどのような影響を及ぼしたのか、

検討を進めることが必要だと思われる。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計０件）

〔学会発表〕（計０件）

〔図書〕（計０件）

〔産業財産権〕

○出願状況（計０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者
　勝沼　聡（KATSUNUMA, Satoshi）
　慶應義塾大学・文学部・准教授
　研究者番号：90593202

(2)研究分担者
　　(　　)

　研究者番号：

(3)連携研究者
　　(　　)

　研究者番号：

(4)研究協力者
　　(　　)